

桜を守る人たち

— 桜守の必要性と地域づくりの担い手としての可能性 —



平成20年2月

美しい多摩川フォーラム

桜を守る人たち

くにたち桜守 大谷和彦

なぜいま「桜守(さくらもり)」なのか？ 東京・国立市の桜並木を守る人々を例にとり、桜守の活動を紹介すると共に、「桜守の必要性と地域づくりの担い手としての可能性」を探ってみたいと思います。

1. さくらへの想い

桜の花は、私たち日本人にとって、なんだか特別な花なのかもしれない。春、桜が咲いていた風景が、卒業、入学、入社など、新しい人生の出会いと別れ、そして旅立ちと重なり、いつまでも心に残っているからだと思います。

また、ふだん花に関心のない人たちも、桜前線が南から北上を始めると、なんとなく気も心もそぞろになり、あちこちでお花見の輪を広げてきました。

その頃の新聞、テレビには、桜の名所の映像と共に、朝から場所取りをする人たち、そして翌日、宴が終った後の様子が紹介されていました。でも、数年前から桜の便りと



共に、「桜守(さくらもり)」という言葉が静かに広がり、お花見をするだけでなく、桜の木が育つ環境にもやさしい想いを持つ人が増えてきました。

2. 国立市の桜並木

国立市は、東京の多摩地域に位置し、新宿駅から電車で40分余りのところにある人口72,000人余りの小さな町です。

そんな町の自慢は桜並木です。JR国立駅で降り、南改札口を出るとすぐ目の前に広い大学通り、さらに東西にさくら通りが交差して、イチョウと桜並木が続きます。

サクラの数は400本余り。桜の本数こそは上野公園、新宿御苑、立川の昭和記念公園などに負けてしまいましたが、通勤、通学、買物など、ふだん生活している町の中にある桜並木としては、東京で一番見事だと思います。

そんな桜の多くは、昭和9年から10年にかけて地元の人たちによって植えられたもので、73年余りがたちました。

一番大きな桜の木は、幹回りが3mを越え風格があるものの、周辺の変化などによって傷んだり、樹勢が弱った木も目立つようになってきました。

3. “くにたち桜守”の生い立ち

そんな桜の木が弱っていることに気がついたのは今から14年前のことです。

ふと見上げた桜の幹の大きな傷、まわりの木も調べたら、あちこちの木も同じように傷んでいました。

その当時は、今ほど桜について十分な知識はなかったものの、そのまま放置しておいたら、数年後には傷口が腐って幹が弱ってしまうことは理解できました。

とりあえず市役所の担当窓口に行き、状況を説明、対処をお願いしたものの、当時の担当者の「知ってます。でも毎年咲いているから大丈夫です」との答えに、返す言葉もありませんでした。

でも何とか元気な桜にしたいと思い、毎年地域で開催されている「さくらフェスティバル」の実行委員会に参加させてもらい、桜の木が傷んでいることを、多くの人に知ってもらいたいと思いました。

でも当時は現在のように、環境問題があまり話題になっていなかったのも、ただ「傷んでます」「弱ってます」と言っても、多くの人がこの問題に気づかないのではと思い、桜に関心を持ってもらう企画を考えました。

くにたちの桜は、「いつ頃」「誰が植えたのか」を調べ、一年目は“くにたち桜物語 第一章 桜を植えた男たち”というテーマで、当時関わった人たちに会い、その頃の話と顔写真を大きなパネルにして、傷ついた桜の写真と共に展示しました。

第二章は、桜の和歌を募集したり、桜の染め物、さらに桜の花を竹に飾った天道花などと、桜づくしをしました。

傷んだ桜の手入れを始めたのは3年目、第三章では、桜のポストカードを作り、その売り上げによる利益で、花が終わった5月に、さくらフェスティバルの会場で呼びかけた30名余りの人たちと作業をしました。

第四章、第五章、第六章の頃には、作業に参加する人たちが80名から100名を越えるようになり、そんな多くの参加者の姿が行政に届いたのか、行政も桜を大事にしたいと、2000年の春、行政と地域住民協働の、桜守活動が始まることになりました。

桜の傷口と目が合ってから7年、さらに行政との再スタートから8年がたった現在、毎月多くの人が、調査、勉強会、作業と、樹勢が弱った桜の保全活動に取り組んでいます。



4. 子供たちも参加する“くにたち桜守”

現在、大人のボランティアとして登録している人は150名を越えていますが、特筆すべきは、この活動に市内6つの小学校の児童が授業で関わっていることです。学校によって、参加する学年は1年生、2年生、あるいは5年生と様々ですが、1学期、2学期、3学期と季節を変えて参加しています。1学期、大学通りの作業に出る前に、まず教室で「なぜ桜の木が病気になったのか」「どうして病気がわかったのか」「なぜムラサキハナナの花が桜の根元に咲いているのか」などの質問を交えて話しています。

その時、児童に一番伝えたいことは、「1年間みんなと桜守活動をしませんが、桜の木だけが大事なわけではありません。桜守活動に参加することによって、一つは地域のことをもっと知ってほしいこと。もう一つは地域のいろいろな人に出会うことによって、国立の町をもっと好きになってほしいことです」と語り、最後に、「桜も元気になってほしいけど、桜守活動に参加するみんなも元気になるんだよ」と締めくくっています。



桜をきっかけに、いろいろな世代の人が出会い、交流があることは、桜の樹勢回復にとどまらず、もっと大切なことなのではないかと思っています。

小学生の桜守活動は、楽しい地域活動です。6つの小学校の1年生から5年生の生徒が640名参加、年3回の大学通りでの活動の延べ人数は1,900名余りとなります。

1学期の作業は、桜の根元に咲いていたムラサキハナナの種とりです。

集めた種は学校に持って帰り、2学期にまた桜の根元に蒔きます。

3学期は治療中の桜に肥料を施しますが、肥料は試みとして、米ヌカ、モミガラ燻炭、糖蜜、微生物活性液を混ぜ合せ、醗酵させて使っています。

肥料は大人のボランティアの人たちが作ったものを使うこともありますが、学校によっては、ぜひ自分たちも作ってみたいと、校庭で授業として作ることもあります。



肥料を作るときにはニオイがしないものの、3ヵ月ほど置いておくと、独特のニオイがしてきます。

ビニール袋を開け、いざ肥料蒔きの作業が始まると、あちこちから「クサイ」という声が聞えてきます。

「クサイのは、米ヌカなどが十分に混り合って、桜にとって良い肥料になっているんだよ」と説明すると、「桜が元気になるんなら、クサイけどがまんしよう」と、アツという間に作業は終わってしまいます。

クサイ肥料を続けているのには理由があります。安全で効果があることは前提ですが、最初の頃、ある学校の先生に「あれはいい」と言われ、「どうしてですか？」と聞いたら、「子供たちが学年を代っても、桜守活動に関わったことを、あのクサイ記憶と共に覚えているから」とのこと。そんな訳で、桜守活動は五感で感じることを大切にしています。



5. 広がる桜守の輪と環境への効果

桜の樹勢回復作業は自然相手なので、なかなか効果が現れません。でも目に見える大きな効果もあります。それはお花見の時のゴミの量です。10年前は桜の季節になると、大学通りの緑地帯にブルーシートがいっぱい敷かれ、翌朝になると、あちこちにビン、カンを含めゴミが山のようになっていました。でも5～6年前から年々ゴミの量が減り、現在は当時の5分の1以下になり、とっても嬉しいです。



また、19年度から新たに高校生も授業で桜守活動に関わるようになり、1年生が参加しています。全国に桜に関わる人たちはたくさんいるのですが、そのほとんどが大人たちです。国立市も大人が元気に活動していますが、その何倍もの子供たちが授業で継続して地域のことに関わっているのは、あまり例がないということで、国土交通省が主催する「平成19年度全国みどりの愛護」の催しで、子供たちの活動が大きく評価され、表彰を受けました。桜をきっかけに、大人から子供まで、それぞれができる範囲で関わる“桜守”の地域活動の輪は、次第に広がっています。

6. 桜守による地域の活性化に向けて

現在、大学通りを中心に桜守活動をしています。幾つかの問題も残っています。一つは、大学通りの桜を管理しているのは、国立市の環境課ですが、一方、さくら通りの管理は道路建設課が担当しており、同じ桜であっても、市の窓口が違っていることです。二つ目は、桜の樹勢の回復が1年や2年ではなかなか見えてこないということです。これは気長に続けるしかありません。問題はまだまだあります。行政の担当者がくるくる代わる中でのコミュニケーションづくり、そして、ボランティアで関わる人も固定メンバーだけでなく、常に新しい人の参加を呼

び掛け、桜への想いを繋いでいくことが必要です。行政、地域の人々、そして子供たちの輪が緩やかに広がり、続いていくことが望めます。それにより、地域の人々と行政との連携や協働が進み、地域の活性化に繋がっていくはずで。そして、次代を担う子供たちの参加により、息の長い取り組みとして続いていくものと期待されます。



今年ももうすぐ桜の花が咲きます。新しい仲間たちを迎え、“くにたち桜守”の活動はまだまだ続きます。

以 上

